

# 図書館報

文庫特集号

第十三号

昭和三十四年十一月七日

発行所 福岡市西新町

西南学院図書館

発行人 山下和夫

## 文庫覚書

館長 船越栄一

戦争中のことである。研究の余暇のアルバートに地行西町にあつた「斯道文庫」の漢籍の分類をやつたことがある。全く専門外のことだけに「書籍解題」と首つ引きで随分苦心したものである。お蔭で漢籍の有名な本には接する機会を得たが、同時に文庫のコレクションのすぐれているのに驚いた。そのはず、この文庫は麻生財閥の後援で、江戸末期の儒学者安井息軒の文庫をそっくり買取つたものだからである。

文庫の豪華な建物は戦災で焼失したが、この建物は電力界の大御所松永安左衛門氏の旧宅であつた。文庫は幸い疎開で戦火を免れ、戦後一時九大に保管されていたが、斯道文庫に關係のあつた慶応大学文学部の

某氏の手を通じて現在慶応図書館に移されている。私が東京に出掛けたときいつも世話になるのは福岡県の東京事務所だが、そこが安井息軒の住宅の跡と聞くのも妙なめぐり合せだといつた気がして、宮城の外濠を前にして今もお静かな事務所の前に立つと、あの斯道文庫に通つていた日のことを思出すのである。

先年愛知大学を訪れた際、これも漢籍が中心であるが、近衛霞山公の霞山文庫を見せてもらつてうらやましい限りだと思つた。一恐らく東亜同文書院の關係者が多いところから特別の便宜があつたのであろう。

学院の図書館にも柳原文庫、村田文庫、小田文庫、藤井文庫がありこの度波多野文庫の整理が完成して一

般に公開できるようになつたのは喜ばしいことである。

斯道文庫にしろ、霞山文庫にしろ、特殊の便宜があつたとはいへ、なお相当の対価が支払われたと聞いているが、わが図書館の文庫はいずれも旧職員の御遺族の寄贈によるものである。この点キリスト教主義の学校ならではのぞみえないことであり、図書費予算の乏しい学院図書館としては感謝にたえないところである。

さて、文庫を見ていつも思うことは、文庫にはそれぞれその文庫によつて代表される人のおいがかしみついているものだということである。

哲学者、文学者、法学者それぞれにその専攻の分野は勿論趣味の範囲まで知られて楽しいものである。つめたい哲学者の蔵書の中に「じようるり全集」や「園芸全書」などを見出すと、何かその人の別の反面に接したような気がして、ほのぼのとした近親感を覚えるものである。

学生諸君もまがりなりにもそれぞれ自己の文庫をもつておられるはずである。そこで学生諸君に申したいことは、その人の人格がその文庫内

容を規定するとともに文庫の内容がまたその人の人格を規定するものだ。ということである。私は学生諸君を社会におくるときに毎月の俸給の五割を図書に購入にあてるようにすすめてきている。本当に読みたい書物は自分の所有でなければ充分に利用できないものだからである。図書館の設備の完備しているアメリカでも図書館は読書の意慾を養うところであり、必要な書籍は自分で買うのが常識になつていゝとは読書週間に際しての坂西志保氏の言葉である。学生諸君が図書館の利用とともに自分の文庫を充実されるように祈つてやまない。

(筆者 本学教授)

## 第七回図書館学会おわる

### のぞまれる方法論の確立

日本図書館学会、西日本図書館学会の共催による第七回図書館学会は去る十月十三、十四の両日全国各図書館から約二百名の会員が参加して、九大教育学部でひらかれた。今回は学会初の試みとして「戦後図書館運動の再評価」というテーマのもとにシンポジウムが持たれ、図書館法制定当時のいきさつが公表され注目をひいた。そのあと、各分科会に分かれて熱心な研究討論が展開された。図書館学方法論の確立と共に理

### 増加図書目録23号刊行

本館では去る十月十日に「増加図書目録」(第23号)を発行した。これには本年八月から九月までに本館が受け入れた和漢書約二百冊、洋書約百冊が収録されている。

奉仕係からのお願ひ

最近の貸出冊数は毎月平均二千冊をマークする盛況であるが返却期日を絶対厳守して頂きたい。

### 新型雑誌架を備えつけ

本館では本年度の事業計画として、雑誌、パンフレット、各種資料等の整備を行つて来たが、その計画の一環として新型雑誌架を購入した。

### 読書週間はじまる

恒例の読書週間は十月廿七日より十一月九日まで行はれる。今年の標語は「みんなで本を読みましよう」



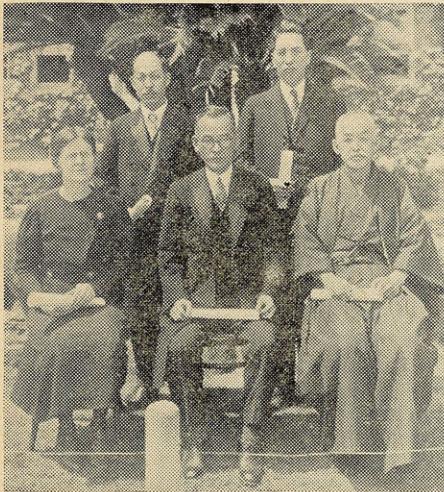
波多野記念文庫

遺徳を偲ぶ二千冊

図書館側の整理このほど完了

故波多野培根先生永眠以来、今年で早くも十三年をむかえた。図書館では寄贈された御蔵書二千冊を波多野記念文庫と命名、仮整理していたが、昨年はじめ本格的整備に着手し、鋭意その整理に当たってきた。この程「波多野記念文庫目録」の刊行をもってこれが完了する。こゝに先生の在りし日の姿を紹介し御遺徳を偲ぶがとしたい。

先生は明治元年、島根県津和野に生まれた。十六才の時、山口県の東崇一先生の沢潟塾に入り二年間漢学を学んだ。明治十八年、京都同志社普通学部に入學、新島襄より直接の薫陶を受けた。明治三十七年より十数年間、同志社中学校教頭(後に校長)の位置にあつて、峻厳なるキリスト教々育者としてその名を知られた。大正七年学内の問題について当局と意見を異にし惜しまれつつ同志社を去つた。大正九年五十三才の時、創立後間もない西南学院に迎へられ、爾來昭和十九年三月まで、すなわち先生没年の前年まで二十四年間在職せられた。その間、中学部、高等学部(後に専門学校)において主として英語、歴史、哲学、聖書等を担当されたが、先生の高潔なる人格と該博なる学識とは當時在学の教職員、学生の等しく景仰止まなかつたものである。先生の白髭と羽織袴の毅然として古武士の如き風姿は夷



【写真説明】昭和10年、勤続十五年以上表彰の記念写真。前列右端が波多野培根先生。白ヒゲをたくわえ、羽織袴を着た古武士の如き温容がしのばれる場所は現在の高校正門附近。他方々列左からC.K.ドージャ、後列左から名譽院長、後列左から伊藤哲太郎氏、大村教授。

にわが学院の誇りとするところであつた。それは正に主イエス・キリストに接木された日本武士道の生きた典型であつた。先生が叫んでやまなかつた徳育の根本目標は「天に帰れ、されば道明かならん。神を求めよ、されば生きん」(「教育預言」西南学院新聞昭和十一年)の一句に

いつか千代町の古本屋山内書店の主人が、波多野先生について、「先生は実に変つた方でした。毎月俸給日になると必ず私のところへ見えて書物を買われました。本間に書物が好きだつた方ですね。」と語つてゐた。これは古本屋の主人にも波多野

本屋も驚く愛書家

在りし日の波多野先生

村上寅次

尽きる。それは儒教に基づく東洋倫理と予言者アモスの愛国精神の、キリストによる統一と新生であつた。昭和二十年十一月九日、祖国再興の前途を憂へつつ眠るが如く静かに、その七十八年の生涯を終られた。

波多野文庫を公開  
現在波多野文庫は本館三階の書庫に閉架されているが、文庫整理完了を記念して波多野記念日の十一月七日およびその前日の二日間、特にこれを公開展示する。

先生が単なる普通の顧客以上の印象を残していたことを示している。それと共に、このことは先生がいわゆる愛書家の一人であつたことを思わせる。たしかに先生が書物を愛されたことは色々の点からうかがえる。波多野文庫を見ても、たいていの本に、その購入の年月日と場所とが記入されているし、今では取りのけられてはいるが、茶色の包紙でカバーされて、先生自身の特徴ある字で書名が記入されてあつた。これはやはり書物を愛する先生の気持のあらわれであつたと思う。  
秋の夜、寮の三階の一番端の先生の室にはおそくまで、灯がともつていたがその頃先生はいつもの様に机の前に正座してこれらの書物を味読しておられたのであろう。  
いつであつたか波多野文庫の書物の間から小さなカードを見出した。それは波多野先生自身の手でつくら

れたラテン語の格変化の表であつた。わたしは六十才をこえた先生がひとりでもラテン語の文法をおぼえようとしておられたことを知らされて感慨深いものがあつた。  
先生の学問は一つの専門を深く掘りさげていくというものではなくつた。それは先生の蔵書が示している。その蔵書は、大まかにわけて儒学(東洋哲学)、西洋哲学、歴史(主として政治史)、神学、聖書学にわたる広い範囲のものである。それは必ずしも原典資料書を多く含んでいない。けれどもそれは先生の学問の目標によるところの結果である。先生の学問は人間理解を目標とする学であつたからである。これらの蔵書は、先生が人間存在の意義を求めて遍歴された思索の跡を示している。総合の学としての哲学から、ついに創造者の意志の下に、その存在の意義、(使命)を発見するに至るといふ、先生自身の人間観の形成を語つている。  
波多野文庫はその人の蔵書が、人間とその思想とを物語つている良き例の一つである。  
(筆者本学助教)





# 蔵書ににじみ出る先生の人格

— 波多野先生の学問 —

三 串 一 士

波多野先生の蔵書であつた図書館  
在庫の波多野文庫を見ても分るよう  
に、先生は一個の立派な学者であつ  
た。時の古今にわたり洋の東西に及  
んで、宗教(専ら基督教)・哲学・  
歴史・文学など世界の粋を集めた名  
著・良書が数千冊に上るのをみれば  
分ることである。

しかし自分の研究に関係のないも  
のでも名著であれば集めておくとい  
つたような単なる蔵書家ではなかつ  
た。これは文庫の蔵書の種別をみれ  
ばすぐに分る通りである。先生は学  
者であつた、と言つた。しかし先生  
はまた学者ではなかつた。学者とい  
うことが何か一つの学問の専門家と  
いう意味では、決して学者ではなかつ  
た。先生はどの学問の専門家でも  
なかつた。先生は良い意味での何で  
も屋であつた。

イルのような思想的歴史家たらんと  
することであつたかもしれない。し  
かし先生は歴史の専門家にはなられ  
なかつた。先生は歴史学者でも、ま  
教師でも神学者でも哲学者でも、ま  
しらて文学者でもなかつた。しかもそ  
れらのどれでもあつた。すなわち  
学者であると同時に学者ではなかつ  
たといえる。

先生に最もふさわしい呼名は学者  
でも基督教者でもなく、おそらく「哲  
人」であつたといふことではないで  
あろうか。まことに万人の齊しく仰  
ぐに足る哲人であつた。もちろん先  
生は卓抜した基督教者であつた。純粹  
な信仰の人であつた。神と基督に忠  
誠を貫いた信仰の偉人であつた。先  
生はかつて自ら自らのことを「私は  
道学者である」と、毅然として言い  
放たれたことがあつた。儒教こそ先  
生の人格の中核であつた。儒教の天  
の思想と節義・仁愛の教は、やがて  
基督教の神と信仰に転換されたので  
ある。その世界歴史の研究は遂に先  
生をして神の摂理の世界支配観の立  
場に立たせるに至つた。すべては神

我々が文庫というとき、それには  
三つの意味があることが知られる。  
一つは図書の閲覧利用を第一義とす  
る図書館の意であり、又一つは蒐集  
蓄蔵せられた個人の蔵書のことを云  
い、最後には叢書やシリーズをも文  
庫と呼んでいる。

図書館を文庫といつたのは大体江  
戸時代以前のことで、上代の大学の  
文庫、寺院文庫、鎌倉時代の足利学  
校や金沢文庫、更には江戸時代に入  
つて幕府の昌平黉文庫などは何れも  
その典型的な例である。勿論これ等  
は閲覧利用の図書館とは云つても対  
象はごく限られたものであつて、貴  
族や僧侶或いは武士階級等の教育を  
目的としたものでしかなかつたこと  
は否めない。小野則秋氏の「日本文  
庫史」の中から目についた二三の例  
を拾つて紹介してみると、現在横浜  
にある「金沢文庫」は鎌倉時代(建  
治元年)北条実時が創建したものと  
いわれ、おびただしい和漢書に四方  
から沢山の好学の士が集まり、又一  
般にも公開されていた。

当時の図書、記録多数が今なお伝  
えられており、現代文化に大きく貢  
献している文庫の第一とされてい  
る。国宝として文選集誌百二十巻が  
ありその他も重要文化財に指定され  
ているものが多い。

的光に照らされ、神的光においてす  
べてを顧る立場に、先生のすべての  
学問が集約されたのである。  
先生が単なる専門家的学者でなく

江戸時代の学校文庫として著名な  
ものに先に挙げた「昌平黉文庫」  
がある。幕府が直轄学校として文庫  
を備へ学生の閲覧に供したものだ  
が、当時相当整備した機構をもつて  
いたようである。図書閲覧規定も設けられ  
ていた。それによると

- 一、御書籍借覽者自分印鑑之短冊  
差出引替に受取候事。返納之節  
右消印いたし候事。
- 一、毎年六月十二日御書籍改に付

## 「文庫」あれこれ



七拾石以上四兩、但壹部に付五  
兩以上の書籍は拝借に相成候事  
(以下略)

として身分によつて貸出を制限して  
いたものがある。金持ち程窮屈であ  
つたようである。

文庫の第二の意味である個人の特  
殊文庫として著名なものには紀州徳  
川家の南葵文庫、尾張家の蓬左文庫  
近衛家の陽明文庫、安田家の松廻舎  
文庫、岩崎家の東洋文庫等がある。

このうち「南葵文庫」は代々紀州  
家に伝わる図書に徳川頼倫が諸方か  
ら優れた個人文庫を蒐めた十萬冊の  
文庫で、大震災で東京帝大図書館が  
灰燼に帰したとき一切を挙げて之に  
寄贈したものである。

「東洋文庫」は本郷の財団法人東  
洋文庫である。岩崎久弥がG・E・  
モリソンの蒐集した中国関係貴重図  
書「アジア文庫」を巨費を投じて購  
入設置したものである。

この外挙げれば限りがないのだが  
東北大学に文豪漱石の旧蔵書のうち  
約三千冊が「漱石文庫」として収め  
られておりその中に彼の書込が沢山  
発見されて興味深いものがあつたこ  
とを記憶しているのが当館の波多野先  
生の文庫も一冊一冊購入年月日と価  
格が丁寧に記入され、又所々書込み  
があつて興味つきないものがある。

学院の典型的キリスト者として人間  
形成に一生を捧げられた先生の面影  
は今尚文庫のうちに生々と残つてい  
る。(Y)

銘々借覽之書日本数等頭取より  
御書籍掛り勤番へ相渡候事。  
とあり、現在の貸出返却手続や、  
図書点検などが偲ばれて面白い。

又各藩の置いた藩費文庫も多数  
あり、中でも岡山兵学館の閲覧規定に  
ふつていものがある。

入学生徒書籍の定左の通に候事  
三拾俵以下書籍拝借相叶候事  
右以上七ヶ年に価二兩の書籍自  
分に相調其余は拝借

「不出軒庭而知天壤」といつた類の  
学者であつた所以である。先生の学  
問のすべてよりも、先生の人格こそ  
が遙かに偉大であつた。われわれは

先生において真に高徳な学者の理想  
像を見たのである。

(一九五九・一〇・二八)  
(筆者 本学教授)



# 文庫

文庫と聞けば星一発四〇円のポケット判が反射的に頭に浮かぶ。しかしこれも昭和の常である。昔の文庫は、奈良朝の文庫の変遷がある。一定の目的を以て集められた書籍の集合体である。その昔、文庫は文字通り文の容れ物であった。その起源は奈良朝に始まりやがて室町に至つてその全盛を極めた。書籍をおさめるもの或いは手回りの雑品を容れるもの等色々あつたが、中でも文箱と称する文庫は手紙を入れてメツセンジャーに持たせる箱であり蒔絵やラデンをほどこしてあつた。また婚礼には櫛箱、白粉箱など十二ヶの文庫を用意しなければならなかつた。文庫本かた手にプロポーズする昨今とは縁のないお話である。

## ア・ラ・カルト

☆☆☆

### 文庫を持つてお嫁入り

### 白秋を生んだ「文庫」派

明治の末期、文庫派と称する文学グループがあつた。文庫本の輪読会ではない。河井醉茗等が中心となつて「明星」の浪漫詩風に対抗した抒情詩派の同人誌であり郷土の詩人北原白秋もこれを母胎として生まれた。

### 「眞似こそ事の始なれ」

日本人のマネのうまさは有名なもの

## 「負けん気が生んだ岩波文庫」

### 「改造」対「岩波」の勝負

文庫本出版の先駆者  
岩波茂雄(一八八一—一九四〇)  
長野県出身。一高東大を経て女学校教師。のち神田に古本屋を開業。昭和二年岩波文庫を発刊して我國文庫出版の端緒を開く。昭和廿一年雑誌「世界」創刊の後文化勲章を受け同年四月死去。

「真理は万人に求められることを自ら欲し云々」の勇ましい文句で始まる発刊の言葉と共に生まれた岩波文庫も今年で三十二才、収容書目二千二百点、発行部数は約七千七百万部といはれる。この文庫が発刊された昭和二年、出版界は非常な不況に見舞はれていた。その切り抜け策とし

「先ず改造社が「全集」ものの円本を出してバカ当りをとつた。それに対抗したのが岩波文庫でありこれまた大好評であつた。改造はすぐに半額の「改造文庫」をもつて追撃したが遂にこの勝負は岩波の勝利に帰したのである。

「世界は小さくなつてゆく」  
ロケットが月にぶつかり地球はいよいよ小さくなつた。ラジオはポケットの中に入り自動車は馬車から轆きつぶされそうな小型になつた。出版界も正に空前の小型時代。ありとあらゆる著作が文庫判、ポケット判となつて店頭にひしめいている。試みにその種類を数えてみるのも一興。

本号は波多野文庫を中心に文庫をめぐめる様々な話題を集めた。時あたかも読書週間、時宜を得て自信をもつてこの号をおくる。



ポケット

『文庫版』A6判のこと。A5判(雑誌大)の半分である。持ち易く、買い易い事を第一とし、大きな本と変わらない内容を持つ点正にトランジスター版である。

ペーパー・バックス

本の装幀材料には、古来さまざまなものが使用されて来た。布地に金の箔押しというものが昔からの通り相場だが、ちよつと豪華な本になると羊や山羊の皮を使う。子山羊の皮からはわづか数冊分のカヴァーしかとれないと言ふから高いはずである。

紙装本

世界中には数百冊の人皮本が現存している。先立たれた愛人の珠の肌を以て自作の詩集を装本したり、手術で切り落とした自分の足の皮や、死んだ夫の背中の皮で古書の修繕をしたものもある。しまいには人間の毛髪まで使つてハンズ・ホルバインの「死の舞踏」の人皮本をつくるという御念の入力方だ。一方いま世界的に普及して来たのがペーパーバックス。その始祖はペーギンだと云はれるが欧米にはそろそろ紙装本の専門店も出来はじめた。日本でも文庫本は全て紙装本。騒々しいマスコミの世の中では文字通り読み捨てる本が現代人にはうけるのかも知れない。

Paperbacks